

教育
相談室

カウンセラーの窓から

相談にみえたお母さんは、淳君（仮名）が、直ぐに泣いてしまうことが気になっていました。

小学校五年生の淳君は、いろんなことをよく知っている、読書好きの男の子です。大勢の中に入るのには苦手ですが、放課後には、友だちも居る地域のスポーツクラブに通っています。

この頃、母親が学校の事を聞いてもあまり話をしてくれなくなりまし。曇り掛けて聞くと「うるさい。」と言って、泣き出すしまつ。そうすると母親が何を言っても耳を貸さずとしません。最初はそんな強情な淳君に腹が立ち、「泣いてないで、はっきり言いなさい。」と怒っていたお母さんでしたが、そんなやり取りが重なる、「学校で何かあるのだからか？」と心配になりました。

そこで、思いきって担任の先生に尋ねてみたところ、「友だちの何気ない言葉に言い返せないもどかしさからか、泣くことがよくあって、周

りの子どもとまどつています。」と言われ、先生が間に入ることで、何とか気を落ち着けている様子が分かりました。

カウンセラーから淳君に話を聞いたところ、楽しそうにおしゃべりしてじゃれ合う仲間の輪に入りたいのに、入るタイミングを逃してしまい、結局一人で本を読んで過ごしている時が多いことがわかりました。家でも一方的な母親

せかさないで聴いてほしい

からの問いかけに、話す気もなくして、「泣いて表現する」という行動になって表れてしまったようです。

同じ遊びや話題に加わったり、同じ物に関心を持ったりして、仲間に入れられたい、という願いが満たされずに傷ついた子どもは、不安定になり泣いたり、やる気をなくしたりして周囲を困惑させる行動をとってしまうようです。家族より、子ども同士の関係の方に心が移る小学校高学年からの

時期は、特に、この傾向は強くなりがちです。

相談を通して母親は、「小さい時から気が弱くて優しすぎる子だからと心配し、転ばぬ先の杖を出し過ぎていたのかもしれない。」と気づきました。そして、「そう、自分から言いくいときもあるね。」と、共感的な言葉を返すように心がけました。そうすることで、淳君の泣きたい、悲しい、嫌だという気持ちが理解できたような気が

しました。後日、「淳君、このごろ泣いていませんよ。お母さん、聴き上手になられましたね。」とお伝えしました。

子ども自身、涙が出るほど何が不安なのか、その渦中にある時は自覚できなかったり、言葉で上手く言えなかつたりすることが多くあります。その子の気持ちを察するためには、子どもをせかさない「心のゆとり」が私たちには必要だと感じています。

(T・S)

はぐくみ

家庭教育を考えるシリーズ

発行
鯖江市教育委員会
鯖江市社会教育委員会
青少年健全育成鯖江市民会議

協力
丹南青少年愛護センター鯖江支所

42号

子どもは 社会の宝です



鯖江中学校『マラソン大会』



北中山幼稚園『プール遊び』



豊小学校『最高学年 スタート!!』



神明小学校『校内体育大会』

**青少年健全育成
鯖江市民大会**
～明日を担う青少年 守り育てよう～
平成24年

日時 9月2日(日)
12時45分～

会場 鯖江市嚮陽会館
桜町2丁目7-1 TEL 52-5789

日程
12:45 オープニングセレモニー
13:15 開会式
13:30 実践活動報告
14:00 講演会
【講師】 岩堀 美雪先生
鯖江市立待小学校教諭
【演題】「聞こう 話そう 明るい家庭 輝く未来」
15:30 閉会式

【主催】 青少年健全育成鯖江市民会議
【問合先】 鯖江市教育委員会生涯学習課 TEL53-2256(直通)

「はぐくみ」は、家庭のあり方についてみなさんと一緒に考えていきたいと発刊しております。子育てのヒントになればと思います。ご意見をお聞かせください。
鯖江市教育委員会生涯学習課 TEL 53-2256

子育ての悩み みなさんはどうしていますか

東日本大震災以来、子どもたちがいかに社会の宝、地域の宝であるかが、見直されてきています。子どもが社会の宝だとはわかっていても、実際には、子どもを目の前にして、どうしたらよいのか、子育ての悩みも多いと思います。

「言ったとおりにしてくれなくて…」



忙しい時に、親の言うことを聞いてくれないと、ついつい語気も荒くなってしまうですね。しかし、親の言うとおりにしか動けない子どもになってしまっても困りもの。子どもは育てるのではなく育つていくものだと考え直してみてもいいでしょう。「子どもの一人立ちを支えていくのが子育てである」。そのように見つめ直してみると、少し子育ても楽になります。

「子どもの正しい育て方」というマニュアル本を手に入



「子育てのマニュアルはないのかな…」

う関われればよいのでしょうか。一つ言えることは、指導のテクニックというものはないということです。子どもたちがつまずいたり、とまどったりしているときに、声をかけ寄り添いながら一緒に歩いていくことが大切だと思います。子どもの言葉を聞き流さないで、問い直してみてください。きつとすばらしい子どもの姿を見つけることができるでしょう。

「我が家の空気を考えてみよう」



子どもは、どんなときに変わるのでしょうか。大人のしぐさに影響を受けてじわつと変わってくる場合もありますし、ちょっとした一言で大きく変わる場合もあります。いずれの場合も、子どもに大きく作用するのは家庭のもつ雰囲気だといえます。明るく温かく柔らかなところによいものは育つ。我が家の空気はどうだろうか。と、ときどき振り返ってみることを忘れないことです。

子どもと共に歩み、子どもの気持ちに寄り添う親の姿は、きつと子どもに届きます。

涓滴

違った者の中で 少し我慢をうけて伸びよう

六月十一・十二日の両日、鯖江市で森作り国際シンポジウムが開催されました。二日目には、「実のなる公園植樹祭」として市内の小学六年生全員が自分たちで育てたドングリの苗の植樹を行ったので、このことを話題にされたご家庭も多いのではないのでしょうか。

このイベントの中心で活躍されたのは「四千万本の木を植えた男」の異名を持つ宮脇昭先生（横浜国立大学名誉教授、財IGES国際生態学センター所長）です。先生の指導の下、アカガシ、ウラジロガシなど十八種類の苗木三千本が子どもたちの手によって植えられました。この時宮脇先生が話された言葉が印象深く心に残っています。

「一種類の木だけを植えるのではありませんよ。多くの種類の苗を植えるのです。好きなものばかり集めてはいけませんよ。共同体とは、違った者の中でみんなが少し我慢をして伸びていくものだからです。」

自然界と人間社会を重ね合わせた教えを含んだ言葉として心に響きました。人は一人一人違ってのが当たり前。違いがあれば当然ぶつかることも出てきます。それを嫌って気の合う者同士集まってもあまり成長はなく、違いを認めつつ、お互いに少し我慢をしながら共に生きていくことが共同体のあるべき姿なのではないでしょうか。

植樹祭に参加した子どもたちの心には、この言葉がどう届いたのでしょうか。家庭は小さな社会。相手のことを思いやりながらみんな少しずつ譲りあって暮らしています。「我慢が足りなくなった」と言われる現代の子どもたち。まず、ご家庭で小さな「我慢」から教えてあげていかがでしょうか。

「涓滴」とは「しずく」という意味。しずくも集まればやがて大河となることの願いを込めて。



愛情

自立

思いやり